# 対話

谷　久光
大岡　信
加山又造
曽野綾子
柴田　翔
田辺勝美
梅原　猛
瀬戸内寂聴
森本哲郎

# 平山郁夫

## 日本文化こころ

実業之日本社

# 対話

日本文化こころ

平山郁夫

対話　日本文化とこころ
平成八年四月二十五日初版発行
著者代表　平山郁夫
発行者　増田義和
発行所　実業之日本社
東京都中央区銀座一－三－九
電話〇三－三五六二－一九六七
振替〇〇一一〇－六－三二二六
印刷所　大日本印刷
製本所　石毛製本所

乱丁・落丁の場合は小社でお取りかえします

ISBN－408－10192－3

© Ikuo Hirayama　1996, Printed in Japan

# 対話　日本文化とこころ　目次

＊対話のまえに
世界から尊敬される「日本」になるために　平山郁夫　7

谷　久光　日本の文化観が二十一世紀を救う　29

大岡　信　直観と創造の歴史観　53

加山又造　「日本画滅亡論」再考　77

曽野綾子　文化の復興は人間の心から　109

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

柴田　翔　戦後日本人のテーマは〝生きている〟こと　131

田辺勝美　日本文化は〝和をもって尊し〟とする　153

梅原　猛　自然とともにある日本画の意義　175

瀬戸内寂聴　日々に生きる祈り　199

森本哲郎　西の論理から東の論理へ　223

●平山郁夫と「文化財赤十字」の歩み　246

装幀――下川雅敏
本文写真――内海弘嗣（瀬戸内寂聴）
執行李信（その他）

# 対話　日本文化とこころ

*対話のまえに

# 世界から尊敬される「日本」になるために

——平山郁夫

# I　日本人に決定的に欠けている歴史観と未来へのビジョン

ことし（平成七年）は戦後五十年ということで、私たち日本人の戦争と平和の意識が、いままで以上にさかんに問われています。が、それがあまりに先の大戦――満州事変から太平洋戦争に至る「十五年戦争」――の是非に限って捉えられ、論じられるために、その内容は非常に感情的なものになりがちです。

私は、ひとつの歴史に対する正当な評価というものは、それに関わった当事者が全員この世からいなくなって、初めて可能なものだと考えています。とくに戦争のような、国と国、民族と民族、権力と権力の利害が激しくぶつかる場合はなおさらです。先の大戦にしても、終結から五十年。いまだ戦場で戦い、戦禍にあった人々が数多く存在するなかでは、その勝者側も敗者側も、互いに感情的になり、正当性を主張し合って、客観的に歴史的事実に対峙するということは、ほとんど不可能に近いと思います。

そのひとつの例が、日本の世論を揺るがした、アメリカ・スミソニアン航空宇宙博物館



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

における『原爆展』の中止問題です。

同館では、広島に原爆を落としたB29型爆撃機「エノラ・ゲイ」の分解修復を行なっており、それが完了し、展示する際に、広島や長崎の資料も含めて、原爆をテーマにした展覧会を企画したわけです。それに関して、私は同じスミソニアン・インスティテューションに属するフリーア美術館所蔵の日本美術品修復計画に携わっているものですから、航空宇宙博物館の館長や『原爆展』の委員長から、相談を受けたことがありました。「資料の借用にあたって長崎はOKが出たが、広島のほうでは原爆資料館に断られた。何かいい方法はないか」というわけです。

そのとき、私はこう答えました。「アメリカ側が、原爆を落としたことの正当性を意図する展覧会なら、それはどう言っても、広島の人たち、さらには日本人を納得させることは無理でしょう。しかし、企画の意図がそうではなく、その軍事的目的は別にして、アメリカが日本の都市に原爆を落としたという事実と、その被害を客観的に捉えたドキュメントというのなら大丈夫でしょう」と。

広島と長崎に落とされた原爆は、いちばん初歩の素朴な原子爆弾にもかかわらず、絶大な被害を与えたわけです。今日ではその威力は数十倍、数百倍に増している。そんな恐ろ

しい代物を抱えてしまっている人類は、まさに自らが作り出した危機と背中合わせに生き、ひとたび核戦争など起これば人類は消滅する。そんな人類的なメッセージを伝える展覧会なら理想的ですし、誰しもそれに協力を惜しまないはずです。

そうしてスミソニアンが改めて交渉に行くと、広島側はすんなり承知したわけです。ただ今度は、アメリカ側の在郷軍人たちが騒ぎだした。「我々アメリカ軍は、戦争を少しでも早く終わらせ、双方の被害をこれ以上拡大させないために原爆を投下した。それはまったく正当な行為で、少しでも批判的に捉えることはまかりならん。もしそうするなら、同時に日本軍の真珠湾攻撃も批判的な視点で展示すべきだ」というわけです。

こうなると、議論はまったく感情的に展開してしまいます。結局『原爆展』は規模を縮小して再検討ということで、今日までその結論は出ず、同館の館長も辞任してしまいました（結果的には六月二十八日から、「エノラ・ゲイ」の胴体前部、プロペラ等のみを展示）。

もちろん同様の感情は、日本側にもあります。「十五年戦争」については、日本が全面的に悪いとされて、それに対してちょっとでも反論すると、その何倍もの非難が返ってくる。これはもう敗者の宿命として、おおかたの場合受け入れてきました。しかし、実際のところは、あくまで戦争とは相手があってのことで、その悪い原因をすべて日本だけが作

り出したということはないはずです。

たとえば、アメリカ人が「原爆が問題なら、宣戦布告以前の真珠湾への奇襲攻撃はどうなるんだ？」と言ったら、日本人も「なら、そう仕向けたのはどっちなんだ。日本の権益の全面放棄を求めるハル・ノートをつきつけて日本を太平洋戦争へと追いつめたのはアメリカじゃないか」と言い返す。するとアメリカ人は「それは日本が中国を侵略したのが原因じゃないか」と言う。それに対して日本人は、「中国への進出は、欧米列強のアジア侵略に対抗したもの。もとはと言えば、鎖国していた日本を無理矢理開国させて、帝国主義の植民地競争に参加させたのは、アメリカのペリーじゃないか」となる。

このように、感情的な歴史論争は結局、収拾のつかないものになり、そこに確かな評価など得られるものではありません。だから、たかだか五十年ぐらいで、先の大戦の歴史的評価を下すのは到底不可能なことで、少なくとも百年、二百年の時間的スパンが必要だと私は思います。

だからといって、第二次世界大戦において日本が戦争責任を負わなくていい、というのでは毛頭ありません。日本がアジア、太平洋地域を戦場にして、多くの人々に被害を与えたことは、まぎれもない事実です。それについて罪を認め、反省し、歴史として子孫に伝

えることは当然です。しかし、あらゆる批判を敗者だからと受け入れて卑屈になったり、逆に国家としての行為に目をつぶり、ことさら被害者意識ばかり強調するようでは、歴史に対して責任ある姿勢とはいえません。

そんななかで、私たち日本人の戦争と平和の意識を考えようとするのなら、単に目先の状況を問題にしているだけではいけません。日本人としてのしっかりとした歴史観の上に立ち、今後私たちがいかにあるべきかという、はっきりとしたビジョンを持つことが必要なのです。しかし、今日の多くの日本人にもっとも欠けているのが、その歴史観とビジョンだと思わずにはいられません。

## II 世界の人びとにとって日本はモノとカネだけの国である

戦後日本の平和と繁栄は、アメリカの軍事力の傘のなかという、一独立国とすれば非常に特殊な状況のもとで育まれてきたと私は考えます。一九四五年、戦争に負けた日本は、明治以降血まなこになって獲得してきた植民地をすべて投げ出し、世界に伍していくため

にひたすら増強し続けた軍隊も解散、それに工業力は徹底的に破壊されて、まさに江戸時代に戻った、という感覚がありました。いわば、振り出しに戻って、再び近代国家としてのかつての繁栄を見るのはいつのことになるだろう、いや、もう二度とこないかもしれない――そんな思いすらありました。しかし、それは結果的に日本にとって予期せぬ幸運でした。

戦後、軍事力を持てなくなった日本は、それまで国家財政の大きなウエートを占めていた軍事費の負担が消えて、すべてのエネルギーを工業力の復興に向けることになりました。これは、一種の国家的リストラです。効率の悪い部門を切り捨て、そこで生じた余剰人員をすべて効率のいい部門に振り向けて、生産効率を上げる。そして、みんながハングリーですから、安い賃金で一生懸命働く。そうして出来上がった品物は、安くて品質がいい。それが世界の自由貿易のなかで受け入れられないわけがありません。リストラに成功した日本株式会社の製品は、またたく間に世界に広がっていったわけです。

それに対して、戦勝国であったアメリカやソ連、イギリス、フランスはどうだったかというと、戦後も植民地を維持するために戦争をたびたび起こし、また東西冷戦の下に軍備を増強し続けます。これを企業にたとえれば、もともと効率の悪い部門の立て直しと称し

て、どんどん資金をつぎ込んで、結局は赤字を雪ダルマ式に増やしていくようなものです。すると、どんなに他部門の業績がよくても、企業は傾いて当然でしょう。米ソという二大企業が競い合っているときは、互いの意地で、たとえ莫大な借金をしてでも強気で体制を維持しようとがんばり続けてきましたが、一方のソ連が勝手にひっくり返ってしまった昨今、アメリカのほうも借金地獄で首が回らず、悲鳴をあげているという状況です。

今日、日本とドイツの経済状況とアメリカ、イギリスなどのそれを見ると、第二次大戦の敗戦国と戦勝国の立場が入れ替わったような気もします。しかし、それならば日本の戦後五十年間にまったく問題がなかったか、というと、決してそうではありません。日本は確かに、経済的には成功を収め、世界をリードする経済大国になりました。日本人の生活はまれに見るほど豊かになりました。

ただ、その経済力と物質的豊かさは、世界の現在と未来に希望を与えるものではありません。むしろ世界各国は、日本の経済力を脅威にすら感じています。この半世紀、憲法で戦争を放棄し、事実一度も戦火を交えることもなく平和的活動に専心してきた日本が、なぜ脅威の目で見られなければならないのでしょう。それも世界各国に多大な資金や技術の援助をしていながらです。



此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com